

Maternal Separation Anxietyについての一研究 — 母親の対人愛着スタイルおよび被養育体験との関連から —

清 瀧 裕 子

I. 問 題

幼い子どもを持つ母親が子どもとの短期分離の際に感じる不安や心配といった感情である maternal separation anxiety (以下、母親の分離不安) について、古くは精神分析的視点・生物学的視点から論じられてきた。母親の分離不安の高さは母子関係に影響を及ぼし、ある程度の分離不安の高さは、母親が子どもの生存や情緒の安心感を促進するために、また安定した母子関係を築くのに必要であると言われている。しかし、高すぎる母親の分離不安は、子どもに対して過保護になり、子どもの自立を阻害するような母親の行動をひき起こす要因となるということも言われている (Benedek, 1970)。

このような母親の分離不安を測る尺度である母親の分離不安尺度 (以下、MSAS) を Hock, McBride, and Gnezda (1989) が作成し、そこから一連の母親の分離不安研究が行われてきた。先行研究では、母親の分離不安に影響を及ぼすものとして母親をとりまく環境、母親のパーソナリティや被養育体験、子どもの気質などが取り上げられ、検討が行なわれてきている。しかし、MSAS下位尺度の一つである「母親の分離不安」尺度を使用したいくつかの研究において、考察に矛盾が生じるような結果が導き出されている。それらを検討すると、「母親の分離不安」尺度にはまだいくつかの側面が含まれており、更なる検討が必要であると考えられた。その際、母子関係が程度分化する時期である3歳の子どもを持つ母親を対象とすることが望ましいと考えられたため、対象をそのように設定し、「母親の分離不安」尺度を再検討することを本研究での一つの目的とした。

さらに、「母親の分離不安」尺度の各側面がどのような特徴を持ち、また、どのような要因と関連が見られるのかを明らかにするため、本研究では、母親の原家族における母子関係および現在の母親の対人愛着スタイル (詫摩・戸田, 1988) との関係を検討することとした。

精神分析的な見地からは、母親の分離不安の高さは母親が幼い時に体験した母親との関係に影響を受けると考えられており、子どもの頃の不安定な母子関係による人生早期の安心感の欠如が母親の分離不安をもたらすという視点、母親が密着した母子関係を体験してきた結果、「自分としての感覚」が乏しい状態にあることにより母親の分離不安が高くなるという視点で論じられている。

そのため、本研究ではこれら二つの視点より、母親の体験してきた母子関係において、「不安定な母子関係 (以下、不安定)」と「母子間が密着していた母子関係 (以下、密着)」の二つから検討を行なった。

また、上記のように精神分析的な視点では母親が子どもの頃に体験した母子関係が重視されるが、人はその後の人との関わり合いによっても自分自身を形成していくことが、内的ワーキング理論など、様々な視点より指摘されている。そのため、母親が幼い頃に体験した原家族での母子関係がそのまま母親と子どもとの関係に再現されるだけでなく、原家族の母親以外の人との体験の影響も考慮に入れる必要があると考えた。本研究では、それが母親の現在の人との関係の持ち方・人への愛着の持ち方、つまり詫摩・戸田 (1988) の言う対人愛着スタイルにあらわれると考え、その関連についても検討を行なうこととした。

II. 方 法

1999年11月に、MSAS下位尺度をもとにした母親の分離不安尺度・母親の原家族における母子関係尺度・対人愛着スタイル尺度 (久保田, 1995) からなる質問紙を、3歳児健診にて3歳児を持つ母親を対象に配布し、後日郵送にて回収した (359部配布し、162人より回答を得、回収率は45%であった)。なお、対象となった母親の平均年齢は31.7歳 (SD=3.6) であった。

III. 結果と考察

1. 母親の分離不安尺度の因子構造の検討

母親の分離不安尺度の因子構造を検討するため、因子分析を行なった。その結果、母親の分離不安尺度からは、母親が子どもと分離した時に子どもの不在をさびしく思う傾向を測る「母親が感じる分離不安」、母親が子どものことを一番分かってあげられている、母親が子どもにとっては一番必要であると思う傾向を測る「母親としての有能感」、子どもが母親との分離の際に感じる気持ちや、子どもの母親に対する気持ちを母親がどのように捉えているかを測る「母親が感じる子どもの分離不安」の3因子が抽出された。母親の分離不安尺度の3つの下位尺度の関係については、母親の分離不安尺度の内部相関を調べたところ、それぞれ.42から.48の間の値であった。

このことから、これら3つの下位尺度は、ある程度関連を持つもののまったく同じ内容のものを示しているわけではなく、母親の分離不安の少しずつ異なった側面をそれぞれ示していると考えられた。

2. 母親が原家族で体験した母子関係と「母親の分離不安」尺度の各側面との関連について

各変数間の相関、重回帰分析の結果より、母子関係「不安定」は「母親が感じる分離不安」「母親としての有能感」「母親が感じる子どもの分離不安」と正の関係が認められた。また、母子関係「密着」は「母親が感じる分離不安」とのみ正の関係が見られた。

母子関係「不安定」と母親の分離不安との関係について、これまでの母親の分離不安研究の中でも関連が見出されてきており (Lutz and Hock, 1995), 本研究で得られた結果はそれを支持するものであるといえよう。また、精神分析的な視点からは以下のような示唆が得られる。原家族において安定した関係が築けてこなかった場合、母親は自分の子どもとの間で、子どもと一体化し、子どもと対していることによって母親自身が安定するという関係をつくる。そのため、子どもがいなくなると、安定をもたらす重要な他者がいなくなるという体験をするため、「母親の感じる分離不安」が高くなるのであろう。「母親の感じる子どもの分離不安」との関連については、このような母親は、母親自身の分離の際の不安、一緒にいる時の安心感を、気づかないうちに子どもの中に見出し、それを子ども自身の気持ちとして捉えるということも考えられる。また、「母親としての有能感」との関連が見られたことについては、上で述べたような場合、母子関係が一体的なものとなると考えられるため、母親は自分以外の人による子どもへのかかわりに不安を感じたり、母親だけが一番子どもにとって必要であると考える傾向が強くなるのだと考えられる。

次に、母子関係「密着」と「母親が感じる分離不安」との間に正の関係が示されたことについては、以下のことが示唆される。原家族の母子関係が密着していた場合、そのような関係の中で育った母親は他者に依存した関係を作りやすく、また子どもが身体的・心理的に近くにいることによって自分が安心するという体験をしていることが考えられる。そのため、子どもがいないとさびしく感じる傾向が強いのであろう。しかし、この結果においては、母子関係「密着」尺度が過度に母親に依存した状

態、つまり母親が過干渉で、子どもの自立性を妨げるようなかかわり方をしていた状態だけではなく、母親を精神的なより所とする肯定的な依存関係を形づくる母子関係の傾向をも測っていた可能性もあり、尺度の示すものが明確ではなかった。そのため、今後の更なる検討が必要であると考えられる。

3. 母親の対人愛着スタイルと「母親の分離不安尺度」の各側面との関連について

対人愛着スタイルと母親の分離不安との関連については、各変数間の相関、重回帰分析の結果より有意な関係が見られなかった。この結果より、母と子の関係は、基本的に母親の一般的な人との関係の質とは異なる性質を持っていると考えられる。また内的ワーキングモデル論の視点からは、個人が持つ内的ワーキングモデルはたった一つではなく、子どもに対する内的ワーキングモデル、同年齢の人に対する内的ワーキングモデル、親に対する内的ワーキングモデルなど、いくつかのものを併せ持っているとも考えられている。したがって、この結果からは、子どもに対する内的ワーキングモデルと、一般的な対人関係の内的ワーキングモデルとは必ずしも一致するわけではないということが示唆される。

4. 総合的考察及び今後の課題

本研究では、「母親の分離不安」尺度の中には3つの側面が含まれていること、そして、母親の原家族における母子関係や母親の現在の対人関係との関連を見た中で、「母親の分離不安」尺度のそれぞれの側面によって関連する要因も異なることが示された。この結果によって、「母親の分離不安」の概念はこれまで考えられてきたような一側面ではなく、3つの概念からなる項目群の集まりであったことが示されたといえよう。今後の母親の分離不安研究について、一つ目にはこの研究結果が3歳児を持つ母親独特のものなのか、それともそれよりも幅広い年齢の子どもを持つ母親においても見られるものなのかということを検討するため、対象を代えての研究が必要であるだろう。そして二つ目に、この母親の分離不安がどのような要因と関連を持つのかということについては、その研究数の少なさから、まだ、十分に検討が行なわれたとは言えない。今後、さらに様々な要因との関係を見ていく必要があると考えられる。